九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本近代文学における作品内作者 : 作品、作品内読者との関わり

安河内, 敬太

https://doi.org/10.15017/2348716

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：安河内　敬太

論 文 名　：日本近代文学における作品内作者――作品、作品内読者との関わり――

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

日本近代文学作品にはしばしば、作品の「作者」を名乗り、介入する人物が登場する。本論は、近代文学におけるこうした「作中に登場する作者」（以下〈作者〉）について、その機能の統合的な把握のための具体的事例の検討を目的とする。

「作者」、「筆者」などの自称、もしくは創作行為への言及により〈作者〉を定義すると、〈作者〉と作品との関係性が重要なものとして浮かび上がってくる。またそうした関係性は、〈作者〉が作品を提示する相手である、「作中に潜在する読者」（以下〈読者〉と記す）をも巻き込む。〈作者〉の登場は〈作者〉、作品、〈読者〉間の関係性を提示する機能を持っていると言える。特に〈作者〉と〈読者〉の関係性が齎す対話的要素は、近代文学の語りにおいて希薄とされるものであり、そうした対話的要素を近代文学に補うものとして、〈作者〉の登場は理解する事が出来る。本論ではこうした〈作者〉、作品、〈読者〉が取り結ぶ関係性を軸に、〈作者〉による発言を解釈していく。

まず具体的事例に即し、〈作者〉の機能を次の六項目に分類した。①（作品との関係も踏まえた）〈作者〉自身に関するもの、②物語内容に関するもの、③作品を形作る言語に関するもの、④〈読者〉に関するもの、⑤〈読者〉への意識の下での、物語内容に関するもの、⑥〈読者〉への意識の下での、作品を形作る言語に関するもの。以上の①～⑥について、〈作者〉を中心とする前半部三章（①～③）と、〈読者〉との対話を取り扱う後半部三章（④～⑥）に分けて考察を進める。

第一章では、二葉亭四迷「平凡」、及び芥川龍之介「羅生門」を取り上げ、両作品における〈作者〉の引用を検討する。「平凡」の〈作者〉「二葉亭」は、その登場はわずかながら、引用される記述の意味付けに変化を与える。また「羅生門」の「作者」は、旧記の権威を利用しつつ、他方では自らの書記行為を強調してイニシアチブを握ろうとする。両者の考察を通し、複数の書記行為の主体が存在する中、〈作者〉が作品に対する貢献を主張することで、作中唯一の〈作者〉となっていることを明らかにする。

第二章では太宰治「道化の華」の〈作者〉「僕」を検討する。「僕」は作者としての重責により、創作行為から逃避しようとする側面を持つ。登場人物の青年一般としての属性は創作によらないため、そうした「僕」の避難所として機能する。だが、一度「僕」により創作された登場人物は自律性を有し、「僕」を創作の場へと駆り立てる。以上の考察を通し、〈作者〉と登場人物の関係が持つ性質を明らかにする。

第三章では、上司小剣「ごりがん」の〈作者〉「私」を検討する。「私」は冒頭で「ごりがん」という方言を解説し、「ごりがん」と渾名される老僧を語る上での前置きとする。一方回想では老僧の「ごりがん」の独自性が示され、「ごりがん」の語に、単純な辞書的説明には収まらないニュアンスが付与されていく。以上の考察を通し、〈作者〉が言葉に自らの経験や主観を付与し、他人には容易

に理解しがたいものにすることを示す。

第四章では、宇野浩二「長い恋仲」について考察する。「長い恋仲」には二つの異なる語りの場（土屋と「筆者」、「筆者」と「読者」）が存在する。両者の比較を通して〈作者〉と〈読者〉の関係を明らかにし、〈読者〉が〈作者〉に、（友人間の私的な雑談とは異なる）読むに値する物語や、「正当」な物語の、「正当」な語り方による提示を求める存在であることを示す。

第五章では高見順「故旧忘れ得べき」の「筆者」を検討する。「筆者」は、落伍者としての登場人物達を辛辣に批判する一方で、登場人物たちと類似する性質を持つ。「筆者」と登場人物は一種の共同体を形作り、「読者」に対立する。こうした関係性が、登場人物への論評を行なう「筆者」の姿勢に影響する。以上の考察を通し、「正当」なものを求める〈読者〉の価値観の下、〈作者〉が登場人物達を一見批判しつつも、実際には保護していることを示す。

第六章では石川淳「佳人」の〈作者〉「わたし」を検討する。「わたし」は、〈読者〉に自分の心情を正確に伝えたいという願望を持ち、却って記述を不安定なものとする。だが言語と感覚の完全な一致が有り得ない以上、言語を通した正確な伝達は結局不可能なものでしかない。故に「わたし」は物語末尾において、自身の試みを諦めようとする。以上の考察を通し、自己が理解される為には、自己を言葉の中で変質させなければならないこと、〈読者〉とは、そうした変質を促す存在であることを明らかにする。

結論では以上の考察から得られた〈作者〉、〈読者〉、作品の関係を整理する。〈作者〉は個人的で、理解が困難な言葉に閉じこもろうとする傾向を持ち、〈読者〉は言葉をある種の型へと解きほぐそうとする傾向を持つ。言語は〈作者〉が発するものだが、〈作者〉だけのものでもない。こうした言語の延長線上に登場人物の存在はあり、彼等は〈作者〉に完全に属する者とはならない。

また、結論では各章で取り上げた作品の〈作者〉における、作品を包括する視線の有無について考察する。さらに昭和十年ごろの〈作者〉に見られる、否定を通した自己規定の側面も検討する。